





はしがき

むぐらみの露かたしきてうた、ねしたる袖をひ
かへてゆりさます人ありふとさめて見たれば玉
のかんざしをゆらかしてにしきあやを身にまと
ひあかもながうひきはへたるいとあてはかなる
ちとめひとひらのふみを手にさゝげ持ちてなん
立てりけるいとうるはしき聲していひけらくは
我はや唐土にては何がしのこきしと雲となり雨
となりて契をこめ此國にては山上のおくらのお
みとまつら川にいとみしはこやの山姫なりつら

翰墨縁

瀧江生雲堂製



つら人の世のあるかたちを見るに西にはなつ
よりとつぎそめてをのこの數も、ちとねがふ國
あり東にはそのめの數はたちまりよたりをつど
へてつねとする島ありこれらはきはことなる物
ともいふべけれどかしこき國ともてはやさるゝ
唐土のならばはしはたいといたう色めかしくて此
おほやまとの國ばかりいろこのまざるは天の下
に又類ななかりけるそれたよゝのかくろへ
ごとのすきづゝしきはなきにもあらぬを倭人不
好淫ともろこしの正しき文にもしるせるごとく

あたゝくにゝくらべては實にすくゝしき國べ
りなりけりさるをこのくにの事はいさゝかの事
も目にみえ耳にきこえ易く人の國の事はこはこ
はしきもどに傳へたるなればたはれつがへれ
ことをしもかへりてさもあらぬやうに物しらぬ
人はおもふべかめりかつこの國の文どもの中に
いせぐゑんどの物語などばかりすきづゝしきす
ぢをかけるものはまたなかりければこのふみど
もをいとらうがはしうあるまじきものゝやうに
いふ人さへあめるはいよゝこのくにのきすくな

る心ばへならずやしかはあれどもこれらのふみ
 どもといへどもたゞをこをみなのならひを
 くさぐさをかしくかきなしたるのみにこそあれ
 聞るみもいたくうちにもはびこるばかりのこ
 とはつゆばかりしなきをるこしの文どもには
 之もいはずたはけてまほにはよみうかべ難きふ
 しぶしをしいさゝかも憚ることなくいとまめま
 めしきふみにさへなんかきあらはしたる張文成
 が遊仙窟などこゑをたかうしてはよみ難きばか
 りの物なるをけざしくと名をさへつゝまで世に

もてはやさるゝは如何に好いたる國ぶりならず
 やまいてそれよりしもの文どもはほに出すべく
 もあらぬもの多しさるをかの伊勢源氏などを
 もらうがはしきものぞといふ人のかへりて彼の
 くにぶみといへばいとうるはしきものとのみな
 ん思ひ居るなるいかに物しらぬわざならずや今
 たはぶれにもろこしづりをこゝのみやび言葉し
 てかきなし見よさてなんいましおほやまとの張
 文成といはれんといとこまかにくだらめてかき
 なさんことといとく難きわざにもこそといへば

すこしほゝゑみでしかたやすからぬわざなれば
 こぞいひこゝろみつれさらばこれを見よとて彼
 の手にもたるふみをとうで、これは人のよにい
 まだかつて無きものなればゆめおぼろけの人に
 みすることなかれひやよ〜といふかと思へば
 うたゝねの夢はさめてひとひらのふみなんこの
 りけるそのさまとくさのたはれごとをいとあや
 しいかいなしたりし女がことばにたがはどとて
 はこやのひめこと、うはがきしてはこの中にひ
 めおきつるをあわつけ人どもの見いだしてよに

しらるゝことゝはなれるなりけり

はこやのひめごと初篇

あつかりしゆふ日もやうく山の端に入はて、
 風ひやゝかに青簾吹きなびかしたるもやのひさ
 しにはしちかうみさり出てかまむしろの上にお
 はしまによりかゝりて前裁の撫子見出したる人
 ありゆあみて出たるほどなるべし花田のおほめ
 ゆひのきぬないがしろに着なしてくれなるのく
 くりぞめのひもいとしどけなげにむすびたれば
 むねのあたりばうぞくに白きはだへのけちゑん

なるを様よくもてなして額髪のわらゝかにおく
 れたるをしろがねのかんざしもてかきてをりそ
 のすゞのからゝと鳴りたるさへなんいと艶に
 てよき程にねびとゝのひたる人さまのもてな
 やうだいいぎやうづきたりしもづかへなるべ
 し柴といふ物もて来て火をけに蚊やりゆるら
 つゝ何にか有らんうちさゝめきていとちびさく
 結びたる一ひらのふみをとうで渡すうなづき
 て取りて見る手はいとよくもあらねど墨づき薄
 くこくしもじながにすきがましうかきまぎらは

したり

かしは木の葉もりの神のたゝりをこそわづら
 はしくは思ふ給へながらに猶得あらではかど
 に立ちてをさめに幾度かはかんだうせられ侍
 しさるをこよひのかたゝがへはひとよめぐり
 の神ごとゝなんすゞろはしきまでにかはは
 よろづはやがて

とぞあめるさるはこの家あるどがけふはものへ
 まかりたるをみそかにせうそこせるかへりごと
 なりけりまきかへしをさむるをしもづかへはゑ

みかたまけつゝ見てあはれすくせといふものは
 かりあやしきは侍らじかし竹の中よりうまれし
 といふかくや姫吉祥天女などいふきはゝ人間の
 種ならねばきはことにもこそ侍めれどあが君や
 てんがのかたち人におはしませばたうだいの小
 町とこそもていつかれさせおはさうずめれさる
 を家ぎみのいとこちなくなほくしくとしさへ
 此上なううへたち給へばあな似げなのしこをす
 くせやと心苦しうなん見給へつるを猶かゝづら
 ひて得もてはなれても物し給はぬはあのおん鼻

のいとかめしきさうにたいたて寢殿もたてつ
 べかりけんおもしろの釣はなもたげの僧都鼻豊
 後などにもをさくけおされさせ給ふまじかめ
 るおん鼻つきのおほきやかさに御心のしむにや
 あるらんと笑へばあながま何事をきゝぐるしき
 にとほゝ為みていふいでやさうぐしくいつま
 でかかくてはと心づきなう見給へしに何がしが
 消息傳へそめ侍りてよりの君のおはしかよふ
 はいみどきおまへのひかりにこそあんなれ今在
 五とぞ人はいひ侍るかゝなど舌どにいふはしに

日はくれはてぬ火ともしかうしおろしなどすれ
 ばきぬゝぎかへ化さうしなどよろづに心して待
 つなるべしゆふ月夜のそらはしたなからずあふ
 ちのおび風もえんなるほどに小柴垣のあなたに
 うちしはぶきて扇をはたくとならすむ例のき
 きつけてしたど入ぞ庭石を傳ひて行くもろをり
 戸はこなたよりさしたれば今ぞ開きて伴ひて入
 るこのけさう人や年なほわかゝるべし物々しき
 けはなくてなよびかにいたうせびやきたり山藍
 にてかはほりすりたるひとへぎぬのつき片手に

くゝみもちでのどくゝと入りくるいとれんどた
 るさまなりすみのまのさうじ口よりおしやりて
 用あらばおん手ならしてなど例の舌どにさゝめ
 きていぬめり火はあなたにほのかなれどえびの
 香くゆりみちて蚊をさふるうすものゝとばりい
 とすゞーげなりはなむしろの上にかまくらふた
 つならべてなえばみたるふすまのはしにさうじ
 みははたかくれてさすがに顔うちそむけてをり
 やをらいらてそび臥しがてらあけくれひいなす
 急たらんやうにならびおはするあるじの君のた

またまおはさでさうぐしくやとぞびらゆり動
 かせば人の心をもしらであなにくといふ口にく
 ちさーよせてぢむるなるべーおびひきときてむ
 つれあひつゝおよびむほとにさしふたぎてぬら
 ぬらとかいさぐれば女もつぐくとしらうこえ
 たる手むのべて男のてうかいやり手まさかり
 にとらへぢどかたみにあまえてしばしこそあれ
 けてけ雨となり雲となりころもひとへもうとき
 にやあるらん名残なうぬぎすてう汗もしとぞに
 らうがはしう我を忘れてよくとぞなくけあがり

て物もおぼえぬなるべしつぎの間にひとりきゝ
 ふしたる舌どびともさすがにかたはらさびしく
 やおもふらんいもねられぬにかすかにうめくこ
 急かみのこほくとおしまるゝおとなどむ
 つ言のはしぐさへなんほのづきこえてなま
 けやけしと思ふをりふー門の戸あらましくうち
 だゝきてあけよしくといふ聲すぢりむくつけく
 てはかへらせ給うけるよといふ聲もいとみそか
 なりかどよりはあわたゞしくほとくうちも破
 りぬべけれとたゞねおびれたるこわねしてをゝ

を、とうちいうへつゝもとみには開けぬなるべしそのひまにみだりがはしき物何くれと取りをさめてなほ別れがてに手をとらへてそばれかはしなどいたくもあわてず例のもろをり戸より出しやりつ今ぞやうくさめたる顔してかどの戸はあくるゑひて帰れるなめりはないきあらうしうして夜はまだいたうもふけにたらぬをまるをひさしうとにたてゝいだきなきもほどこそあんなれいみじう蚊のくひたるはとこちぐしうよろぼひいるをしそくさしつゝしりめに見おこ

せてしげしかどに立ちぬるをだにいたくもかうじ給ふよ今めかしきおんあたりにていかなる人とか酌みかはし給ひつらんを小夜ふくるまでまろねしてまちわびし心のうちはおもひくらべ給はでとゑんどかゝればいであれ思はずなりやいたく酔ひたるを心にかけ給うそわがおもとをおきては如何はしとはなやかにうちわらひつつよろめきたふれんとするをあな危ふしやといだきながらもろだふれにふすまのうちへまろびいりてそのままひたとそひふすなめりまた如何

なる夢をか見んとすらんとをか
 今きのわらはのすこしませたる流石に世づいて
 はあらぬなるべしまださとびたれどねびぬら
 んおひさき見えてまみのかをりなどよしげみら
 うたきがよろづうひくしうつましげにて日
 ひと日さふらひくらしつ夜は家とどのかたはら
 のさうじを隔て、次の間にぞねたる晝は何くれ
 とまぎれたりしさと親はらからの面影につと
 そひて戀しう忘れねばねられぬまゝにかれや
 これやとすづろに思ひつらねられていよゝねら

れねば物心細く物おそろしきけさへそひてはて
 は涙のほろくゝとこぼるゝを衾のうちにかいの
 ごひなどしつゝたゞ眠らんことをのみ思へばい
 とゞあやにくにてやうゝに夜もふけぬめりは
 したなき風の響ぬりごめのねずみのおとなひに
 もむねつふれてしづまはるゝをりふゝあやしう
 障子のきしめくおとしてひしゝと物のあしお
 とのより来るやうなるは心のなしにやといみど
 う念じておそろゝのぞきたればせしやうのか
 げよりあるじの翁のはひくるなりけり變ぐ急よ

り實におそろしうて物もいはれずわなゝかるゝ
 をふすまかゝげつゝおいしたよゝみてをみなは
 よろづにつひえ多くて物なんとししかめるをま
 ろにな心おきそやたうばりの外に何にまれくれ
 てんゆめみそかにてをなごことよがりてやをら
 すべり入りぬ逃げんとすまへどはなたずひげが
 ちにしわみたるあぎとすりよせてねび入とてさ
 なはしたなめそ若人はすきばしうてあいなく
 心の深からぬぞかしさばかりいふ甲斐なくいは
 けたるほどにもあらぬをなごけとおほくいひつ

づくれど耳にも入らねばたけきことゝはたゞわ
 なわなとねをのみぞなくきえかへりはづかしと
 思ふほがみむかまゝのあたりには手をさへらるゝ
 だにあるをまいて何とかや見しらぬものゝむく
 つけうさはるいひしらず身もあつしくなりてか
 なぐりはらはんとすまふきしろひに男もひたふ
 る心をおこして身をおしにしてつとさし入るゝ
 にあなやといひけれどなかばはふくまれたるな
 るべしこのものおとに家と目さめてあやし何
 ならん盗人やいりたるいづらくそたちおきねお

きねとたちさうどきて火かゝげなど出まうでく
 るにおきなはぬくもはしたさすもはしたにて
 しひの葉にをもものもりて草枕せし世の手ぶりに
 はこよなうやうかはりてはなになりたるみち
 みちのうまやくひなのはてしもみつばよつば
 にたてつらねてゆきゝの人を待つなるべし夕暮
 かけては殊に賑はしうかど毎に女ども立ちてお
 ぼどれたるこゑして呼びとめつゝなまめきそぼ
 れて袖をひく引かれて入るもありすまふもあり
 ておのがじゝいとさまぐゝなめる中に顔よきを

みなのひく家なん宿れる人のいと多かるもをか
 しさるはあて人よりはじめてたびしがはらまで
 あふさきるさにきつどふめれば勢猛にいかめし
 きははんでんしなどの都のそらにきつゝなれに
 しつまをおきて旅寐さうぐゝしくや思ふらんこ
 ちごちしうみなかびたるはさきもりなどにやあ
 さぎぬのかたのまよひもひとよづまはとり見し
 ものをとあはれなりいづこよりいづこへわたれ
 る旅うどにやあるらん三人四人伴ひたるがもや
 のひさしひとましめてをり一人は四十路あまり

なめり顔もちいとくべくしく一人はよろづさ
 しすぐいてわざともてつけえんがるわかうど一
 人はこちなき鼻聲の翁なるべしこの顔もつ人は
 めぶねのうちより手はたくとうちならせばあ
 といらへて出まうで来るは袖してひきいたる
 女なりこちこくとあぎとしてよび近づけてそ
 びらのあかかい洗はしめつゝ語らくまらは何が
 しの長がもとに宿らんとこそおもひつるをおん
 ことやしひて宿してと尻ひとつみて何くれと
 いふこと有るべしおきなわかうどのともに見

たりあしいくさしなと定めおきてたればをもの
 まぬれ火やさふらふなどよろづに心を用ゐてあ
 るが中にこのかほ持人をだいじとしていつくめ
 るも流石にあはれは深きなるべし髪はいまやう
 にすきがましう束ねてくゝりぞめのはねかつら
 し黄楊の小櫛すこしかたそばにさしたり顔には
 うくばかり白きものぬりまかなひべにといふも
 のはしたなきまであからかにさしたる口つきや
 うだいざれてをかーとさるかたに見えたりくち
 ばのしげめゆひのきぬにやなぎの帯いとしどけ

なげに結び垂れてこきくゝりぞめの襟ばうぞくに
 着なしたるにつれてねりてゐる二人は少しさ
 だすぎびとなめりふつゝかにこえて尻もちいか
 めしきがあふちえびぞめなどはなやかなるきぬ
 ども着て帯はけもんれうなどにやあるらんこ
 う梅の襟のけぎやかにもて出されたるさへなんこ
 ちなかりける若人は殊に心づきなげにてねたげ
 に顔もち人をゑんずるも甲斐なしいとしたりが
 ほに例のあぎとさしそらしてへいどとらしめつ
 つみさかなはなぞの物ぞあはびのすにこよろぎ

の磯のわかめつきかてゝよかなりゝなどはか
 せぶりであざればむもいとにくしやたゞ酒をこ
 そとかはらけあまた度めぐらすねび人はよろづ
 にれんじて御心にそまぬなんいとつらきなど心
 深げにすぎきことの葉をも出すべかめればゑび
 てははじめにも似ずなえゝとなりてひらめた
 見し鼻も高く見えはなやかなりしわきくそさへ
 えびの香とぞきゝなざるゝや三味線のこと胡弓
 のことらうがはしうかきあはせて今やううたふ
 よし田をばめければ袖ふるたかどのにかのこま

だらのながきたもとを

また

をかぎきのをとめうらぐはし岡崎のをとめは
あやにうらぐはしをとめ

やれなおけしなど鼻聲にはうしとりて翁はき
ぬもかいやりすてそぼれまふめり若人さみせ
んのことすがききて

たらちねの母にたぐひてなつびきのいとより
をればひむがしのみさかまどより玉づきのふ
みなげいれてあやにくに我にはあたらずたら

ちねの母にあたりぬ母はもや我をぞ見ます我
はもや母を見つゝもその文は見まくほしけど
まなしひのかぐみ見るなすきかまくのほしけ
れども耳しひのことゝふが如すべのしらなく
となん聲をかしう歌ふをいいたしや手なのこ
ひ給ひそなど女ばらのめであざむをねたうや思
ふらんあふぎとりてをりく膝ばうし鼓きなど
いとうもれいたかりしかほもち人となんしはぶ
き二つ三つしてこれはましたちが知らぬさいば
らのことゝて古代に行はれしうたひものよとて

ね、なく、あはれね、なあこがま、はいづち
 いにけんやいづちいにけんあの山こえてさと
 へかいにけん家づとは何かもてこんやそよや
 とんどろつづみふりつづみそよや
 とふるめかしうつづしり出たるあはれざるがう
 をもうたへかしと人々しにかへり笑ふめりやう
 やうに夜も深けにければほどなき所なればべう
 ぶみつにつぼねてふいたり顔持人は中のつぼね
 になんありけるそらねしてしばしまてばをみな
 はかはやより出まうできてはやうね給ひにけり

な今宵はすづろ寒うてあしなんつめたきをゆる
 い給へやといふくつづくとやはらかなるあ
 しをむかもし、のあたりになし入れたる忽にこゝ
 ちときめきしてしばしもはためらはぬなるべし
 心ゆくかぎりむつれあひてとばかりある間に右
 より左よりかのさだすぎんどもこのをみなをよ
 ぶなりなぞといへば屏風のかみより一人はおよ
 びみら一人はいつゝさし出てもに笑ふかれは
 なぞと問へど女も笑ひて言はぬなるべし
 あはれおなじうはともにおいてひとつ穴にと契

りかはし、おもしろい人におくれてはよろづあひな
 る世の中いとほしくて命ながさのうしろめたう
 とくひとつ蓮にもと願ひわたるにつけては佛を
 いみじう頼みきこえて何がしどの、みはかうく
 れがし寺の佛名なとたふとしときくわたりには
 うちまうでつ、あけくれのなぐさめにも唯經ほ
 とけくやうじなどいとかごかにすまひなしてや
 うやうにねびとゝのひたるさかりの程をあたら
 しいそぎすてたる髪のかゝりやつれたるにひ色
 さへぞなかくゝになまめかしくなつかしくなん

見えけるはじめいむことさづかりし何がし寺の
 だいとこを深く信じて後の世のたのもしき要も
 んどもを折々まうでうけたまはるなんこよな
 う物思ひけるくるわざとしてありわたるあひだ
 にやうゝなれて常にもゆきかふめりけふはだ
 いひさのけちえんにとてまうでたるをとゞめて
 いもひのだいどもてうじ出たり灌頂の水にはあ
 らでかはらけをさへもて出たればいと思はずな
 る心地はすれどもいけるほとけとも頼み聞ゆる
 わたりなればしひてもかへさひまうさぬなるべ

し痛くしひそして自も目すりあかめつゝ近うみ
 さりよりていふいつぞやも聞えつる如く女人は
 いつゝの何がしとてつみいと深かんなるをかう
 まで佛の道に入りて何がしを頼みわたり給ふな
 んよにあり難きおん心おきてにこそかゝればお
 んためとこそ何事もおもむけつかうまつる何が
 しなればそのまうさんまに〜つゆそむかじと
 こそ覺え給はめといへばひと言のげのためには
 鬼にも咲はれんとなん思ふ給ふるをまいて聖の
 おんをしへを如何はといとじほうにきゝなした

るもいとほしけれどすく〜しき法師心にはえ
 しのびはてぬなるべし手をとらへて志賀寺の上
 人もゆらぐ玉のむとなん聞えはべりしはやあが
 佛あが佛いかで〜と手をする〜よりそへば
 まことにゆくりなくむく〜しうて心つきなけ
 ればものも言はれずあきれたる顔つきのたゞな
 るよりはらうたうこぼるゝばかりのあいぎやう
 にてけしきばかりそぎたる髪のはつれのわらゝ
 かにおくれたるが魚ひてすこしあかみたるまな
 じりにかゝりたるさへいと艶なるをさまよく

すべり逃れんとてとかうするはしにあをにびの
 衣のつまよりしたものがいねりのおしたうなは
 れて白きはぎのすこし見ゆるに何かはひたぶる
 心もおこらざらん世尊もらごらはおはしますも
 のを人には木のはしの様にこそ言はるれ心は花
 になどことよがりつゝひしと抱きてあが佛やた
 とへごゝのしなのかみといふとも君がげぼんの
 れんだいにのらんにはなほこよなうぞおとりた
 んめるをこの煩惱救はせ給へ阿彌陀ぼとけのち
 かひにももゆる思ひはけち給ふとこそいみじき

功德にいがて成佛せさせ給へやあがほとけく
 とうつしごゝろもなうあざえて身をおしにして
 やをらおしなびけたれば女もさこそいへどゑひ
 てはこゝちひたゝけてめづらしきをのこのはだ
 への手にふれ足に觸れなどやうくあやしきこ
 こちにもなれるなるべしつひにえすまひはてす
 のがれぬすくせとなりければはじめはかなぐ
 りたりし手さしのべてうなじにまとひてしろう
 にほひやかなるほゝすりよするらうたさいはん
 かたなしいとゞ法師ははやれるなめりぬれぬさ

きこそとやすこしほいなう
 うちにもをさく人ずくなにうちしめりたるよ
 るの雨のつれづれなぐさめかねてこゝにしもつ
 どへるなるべし臺盤所のおほとなぶらのもとに
 ごたち三人四人かしらつき合せてしめやかに物
 がたりす式部と聞ゆるはわかんどほりばらにて
 年もいさゝかねびたるべし右近ぞまだいときび
 わなめる猶何のおもとくれのおもとなどいづれ
 もほのすいたるとちなれば男のよきあしき人の
 かくろへごとをさへによだけくいひもてはや

などよろづにかけくしうよづかはしきすぢの
 みなんおほかめる中に少納言の君こそめつらか
 にをかしき物語繪もたまへりとやまろらには心
 やましうひめ給うてとひとりがいへばさかし命
 婦のおもとはほの見けりとなん今宵などこそは
 とうで給はめこのつれづれをもなぐさめてま
 とつま聲にせめられてやうくに少納言わが曹
 司よりとうで來たるをさしよりてわれがちにひ
 きひらき見るめでたき男女のなびきあひてねた
 るがおほふべきあたりもけち魚んにていとばう

ぞくなるかたちどもをうるはしうあまたかきあ
つめて上のかたにそれが言葉をさへなんいとよ
き手してしるしつけたるあなかたはや見苦しと
口にはいふし見とれてなまはしたなうあやし
きこゝちにもなれるなるべし武部がいとこのう
まのかみなんとのゐのついでにさしのぞきたる
をことばがたきえまほしきむりなればとらへて
かたらすこれもいみじきすきものにて目ざとに
見つけてあやしひきかくし給ふはなぞの物ぞこ
こにもいさゝめに見せ給はらばやいでやまさぢ

う何かはといふはしにはやひと巻とりて見るか
かるものごらんせさせ給うてをはせがたをこそ
ときめかし給ふめれこの物やなまくのものをこ
はづかしうきん達にらうたがらるゝなんいみじ
う羨ましきといへばあなきゝにくあべい事かは
妬うもろうじ給ふなん人にこそとつきじろひ笑
ふ何がしのおき人よりなごりなうきこゆるもの
をつれなのおんちぎよさよとすこしほゝ魚み
てむかはおほとしの神の子に若年の神といふ神
なんおはしけるいちはやくたゝりて稲ども枯れ

なんとし侍りける年なんこのをせがたといふ
 ものでうじ出でまつりたりければ神の心なご
 みにけりこれなんこの物のいできはじめのおや
 なれば公達はあしたゆふべに此神をこそたいせ
 ちにもていつかせ給ふべかんやれといへばまた
 つきじろひ笑ふことのさまいとけうありければ
 右馬頭いろごのみのはかせぶりてはなのあたり
 をごめかしつゝうべくしうまたかたり出すを
 とこをみなのなからひばかりあはれにたふとき
 ものはあらざりけらし天地開け始まりし時いざ

なぎいざなみ二柱のおん神の尊のまぐはひし給
 ひしよりなん人間の種も出まうできておのがじ
 しすきわざはすめるこのまぐはひといふことは
 とてちかうゐたる右近をゆくりなくとらへたれ
 ばあきたるをひたといだきてかうまくるひ
 あふといふはぶきことよといふはしにやうく
 すべりのきてつまはじきをして右馬頭をあはめ
 にくむに皆しにかへり笑ふ猶ふりはらふ袖をひ
 かへてくふとはむはせをほとくふなりあふと
 ははだへのひたとあふなりいさ君とれわとくひ

あはせておもとたちにごらんせさせばやとてま
 たよりそへばむくつけくてかひなをすみなどし
 てすまふものからあざればみたるわかきこゝち
 には流石にをかきかたもやまじるらんさこそ
 いへどしひてもかなぐり拂はぬなるべしまたお
 ほむちと聞えし神はその女神すせりひめと玉
 手さしかへもながにわかゆるむねをそたゝき
 うながけりておほとのごもれりとなんあめるそ
 れはかたみに手をさしかはしてかくさまにいだ
 きあひてもながとはこのむかもしをかうなが

やかにと右近が衣のつまに手さしいるればあな
 や何事をしれぐしくとしまひわぶめりきて
 なんやはらかにつぶくとしたるむなぢのあた
 りをたゝきなどそぼれかはしてうなぢにかひな
 をまとひてそひふし給へりけん如何にすいたる
 神たちには侍らずやとそのすがたどもをまねび
 なしつゝ手ふれあふれなどするあひだにはい
 めのほどこそたゞさるがうわざとおもへりし右
 馬頭もこゝちときめきもしぬべし猶いたくそぼ
 れてむごに放たねばものめでせしねびこたちは

らもやうくになまけやけくかたはらさうぐ
 しく例のはこの中のたのもしびとやこひしうな
 りぬらんぬけくしにすべり出てたれも見ずなり
 にければそのうちはいかぶありけんしらす
 まだよひなるにこの月をも見ずなどかくかうし
 はおろしこめでといふくやをら入りて見れば
 皆ねにけりひとり燈臺の下によりてふところ紙
 のあはひよりひとひらのふみとうでよむ紙の
 たなはるおとをしいたうかいひそめつま
 だなかばをもえよまぬほどにうしろよりふとか

なぐりとられつこはなぞとあきれてふりかへり
 たればはやうねにけりと見て心におかざりし女
 のはひよりてとれるなりけりためめられたるが
 いとにくければつきりなることも出くめるをす
 かいてをこづり取らんの心にてしひてほゝるみ
 ておんことやなぞまさなきそれはいとたいせち
 なるおほやけごとを何がしのもとよりいひおこ
 せたるなりおほくの子の親となりていつまでか
 若々しう物ねたみはするとはしたなめけきやけ
 ばすこし笑ひてそのおほやけごとのはことふみ

にこそあめれまるがもたるはくづつのにぞ侍る
 や多くの子のおやにもねたみはたがせさする
 にかは侍らんかなしきめこどものためには心に
 もそまぬうきことに身をさめくるしきわざをも
 いそしみつとむるなんよの中の男のならひぞか
 しよーやさこそあらね世のわたらひのとあらん
 かゝらんとだにすこしは口をもいれ給ふべかな
 るを子どもは野山の草木などのやうにひとりお
 ひたつものとかはおぼすくづつのためにはうしな
 ひはたせとておやよりゆづりはうけ給はざらま

しものをそれも男のつねには侍れど物にはほど
 といふことこそ侍れとすくくといひつゞけて
 かの文をひらき見る

しばしのおんとだえもこそうしろめたけれ何
 事かおはしますらんやほかにますはな手折そ
 め給うけりとかほのうけ給はりつるはじちに
 や侍らんまたは例のいちはやきさへの神にや
 さへられさせ給ふとさまかうさまに思ふ給へ
 みだれて身をしる雨なんふりまさり侍るやひ
 と日ひとよも見たいまつらねばも、夜のこゝ

ちもし侍るものをやうくおよびをるばかり
 にもなりにて侍りいきてあすまではともきこ
 えまほしうてなん思ひあらばよろづはたいめ
 に
 とぞはしりかいたるいでやめざましうもかいな
 しけるよなきへの神とはまるがことをろうずる
 にこそあんなれ人の男をわが物がほにといとも
 のしとおもへるけしきにてはてくはよとぞ
 なくこのたじろきに今年みつにちりけるちこの
 いとらうたきが目さまして二人が中にはひまつ

はれてなきみ笑ひみするいとうつくしければこ
 れに心のなぐとはなけれど男もおのれわろしと
 はしらぬにはたあらねばちごもてあそぶやうに
 してまづ親の心をとるさすがにあだえてひきそ
 ばむを懐に手さしいれてちかいまさぐりつう
 しろよりやをらはだふれてちごにちふくめ物う
 ちいひなどしはしたはふれてあるあひだに女も
 やうう下ひもともにこちなごりなうとけあ
 かなるべしころもばこ物のつしなどひくと
 きしめくに三郎のなつなるがまた目さまして

あなやなみふるくくとそいふ
あそびくづつなごかるめいへばいとかやすきや
うなれどそれが中にもきざみくなんありてか
みがかみは四位五位の國のかみ勢あるせりやう
などをしつれなうはしたなめなとうけばりてい
みどうおもひあがるもてなしやうだいあては
かにらうくしうきはことなるもこそ多かるべ
けれまたしもが下に至りてはいとくほしうさ
だすぎたるあやしうやまひにかりて鼻のがみ
たるなど晝はけしう見えぐるしきどちが夜に

まぎれてつじくに立ちてあふさきるさの袖を
ひかへていともしはかなう世を渡るさへなんあめ
る中のしなぞいとめやすくよしばみてあいぎや
う多かる程なればほのすいたる若人などは命
にかけてたましひを失ひあくがれまどふも多き
なるべし實に賤しきも見悪きもわいだめなうう
るはしう玉しけるばかりのめでたきやにしてい
つかれうみ山の肴甘露と覺ゆる酒にあきて萬の
物のねどもに心をなごめかぎりなうめでたしと
見るをみなのかたより我心にかたふべからんや

うにけしきとりてなごやかなる衾の内へいざな
 ばれたらん何かはをのゝえもくたいつべからざ
 らんやうゝなれて通ふまにゝいづくよりと
 うづる言の葉にかあらん情の爲には心にしもあ
 らぬことむけざゝといひなして目に見えぬ鬼
 神といふともとりひゝぐばかりの猛きものゝふ
 の心をもやはらぐるなるべしひと夜の程にはい
 くばくとなう入くめるまらうどづものおのがじ
 しの契どもはあはれなるもえんなるもをかしき
 もしれぐしきもいとさまぐゝなんあべかめる

中にふかういひかはせるがすこしあだえたるな
 からひなるべし男は衾なかばかづきてうちそむ
 きをり女はとうだいのもとについみて手まさぐ
 りにかんざしもて手習のやうにたゞみに文こと
 ばかきけちなどしばしたゆたひつゝやうゝに
 みさりよりてゆるい給へや何ごともしまろなんわ
 ろかりけるいふせうおぼし疑ふも理になん侍る
 をさらがへりていひとき侍らんは中々にこそじ
 ねんにおぼししるむりの侍らじやはといへばな
 ほそむきなぐらいともものしと思へるけしきにて

よげにもいひなすかなかひぐりからねとこの
 さとには面しられたるをのこぞか親はらから
 にいさめられつゝ多くの黄金はたが為にかは失
 ひはたしさとせうとがからき世渡り母のばう
 ざがかなしきものがたりなどぢちにあはれと思
 へればこそぢねんにふかうのみなりもてきてき
 りかはしたるくる髪もしれぐしけれど今なほ
 うなドにかけてもたるを人はしらじとおもふに
 こそあめれ何がしどの内人におよびきりてお
 くれりし事はやうしらざらめやはもともあはあ

はしうてたゞ賑はしきあたりにのみよるなつり
 とはもとよりしらぬにはたあらねどわらぐつも
 て踏まれたらんやうなる此おもふせこそ身もい
 とあつしきまでにと猶いはんとするをよと泣
 きて聞えどとこそ思ふ給へつれどなほ得あらね
 ばくだくしうもや聞ない給ふべからんのため
 はするやうにかずくのたから失はせまぬらせ
 てかぞの君のみけしきあしうは誰がせしことに
 かけ侍らん皆まるが罪とたいぐりしうていよ
 たいせちと思ひ聞ゆるにつけてはさめてはこた

びのふすまばかりは君を煩らはしまゐらせじと
 はかぐしからぬひとへ心になまさかしう思ひ
 つめ侍りてこのほどき通ふかのうち人なん心づ
 きなうは見ゆれどまだきびわにて心のいたり深
 からぬをすかいておよびけしきばかり切りてな
 ん侍りしさてふすまでうぜさせてのちかうく
 なんと聞え出てもに笑ひて淺からず君をおも
 ひ聞ゆる心のしるしとなしてしがなとこそ思
 う給へしかおもへばいとなんやくましかりける
 今更にかう聞ゆればとて心は見ゆるものにしも

侍らねば猶たばかりるやうにもぞおぼす深き思ひ
 を見えたいまつらんとてなかくにかゝるおん
 かうぢひき出たるしれぐしきは誰にかはかこ
 ち侍らん唯我身ひとつなん恨めしうと男の膝に
 かほおしあてゝさめぐと泣くかうつくぐと
 きゝはでゝはいかめしうはりたるひぢもちのお
 きどころもなうなえくとなりて何にはしたな
 うあらましくはいひけんとな人の思ふらんほども
 かたくなしくてかみぶくらかいさぐりつゝわが
 おしとやいたうなふすべられそかいなでにおも

はましかばさてもありなんをつひのよるべとも
 思へればこそさるくまゝでも深う思ひいりてた
 どりにけれふすまのれうかばかりのこがね何か
 はいさく〜とていとあまたとうでちりぼはす
 ればやう〜に顔をもたげておんいぶせさのは
 るけたるなん何よりもいと嬉しうといひつゝこ
 がねはながし目にうち見たるのみにてあなう物
 をいたう思ひければにや例のけあがりてもねな
 んいたきをなめくもすこしこゝをおしてと手を
 とらへて懐にさしいるればいづら〜とこゝち

まどはしておんゆまゐらずやひえては風もこそ
 おこれこちより給へなどあわつかたふすまかつ
 けそひふ〜て何くれと心をとるつひにはらうが
 はしうなびきあひてあり〜よりけにむつるゝな
 るべ〜まち給へやきぬもこそけがるれ紙もて侍
 るものをもと男のはだへごめにおしのごひつゝや
 をらすべり出てかはやにぬくとてこがねとりを
 さめてたつなるべしいなばの山のとやたのめお
 くらんこのにしのたいにもまつ人あめりめだう
 の板じきをばた〜と鳴らして歩み來てさうじ

ひきあけたるに衾かづきてひとりふいたる男ありぞらねなるべしいびきとかあやしうかしがましきおとさへぞすめるくらうなりたる油の火をかんざしもてかゝげなどして人の心をもしらていぎたなうておはしますかなとやをらそひふがてらぬりうごかせば今ぞさめたるかほもちてあくびうちしつゝうしもやゝみつよつはすぎぬらんをいづこのけさうびとがりそほれありきてかうぞらだのめはするとゑんすめりいでそよたがまうさんずることにかは侍らん何がしの長

がりおはし通ひていまずかりつるをさだかに見とめし人なん侍るやさるたのもしげなきおん心おきてともしらでさらがへりていとかなしうと袖もて目おしのごひつゝわが身は如何になりはてんとかすらん思へばくあぢきなう身もなげつべき世になり侍りにけりはやうより通へる人のいみじうなさせ深くて萬にうしろみ給はれるなにかなればか心づきなううるさくて君がなげのおん情は身にしみと露わすれがたう思ひそめたいまつりーからにおよびまで切りて

このよならずいと深う契りきこえて身をこそま
 かせたいまつれりしかこのこと早う聞きしりて
 いとほらあしう今は何事をもうしろみどこのほ
 どたのめし衾をもてうせさせじいみじきはぢ見
 せつればたいめもかなはじとなんいといたうむ
 つかるを君はすげなうおはしましてあたします
 はなに見かへさせ給ふかうしらませば彼の人を
 つひのよるべともたのみわたり侍りなましもの
 を君ゆゑかの人にも見はなたれて其君にさへ見
 すてられたる我身の中ぞらによるべなき心ぼそ

さを少しはあはれとおぼししり給うてといと
 はかなだちたるこわねしてなきませつゝいひつ
 づくるを聞けば身もすぶろはしきまでにおぼえ
 てほろくと涙もこぼれぬべしいでやない給ふ
 なまるあらんからに其うしろみ人何にかはせん
 これよりこそもてはなれてもあらまほしけれそ
 やつがうしろむばかりの事まる得せざらめやは
 その見んずらんところもあなればふすまはあす
 とくてうせさせておこさんない給ふな〜ま
 ろがほんせうの心ながさも今おのづからおぼし

しりてんあまりくしいたうなない給ふそまるさへにむねなんいたきをいざ〜とかきいだきてはだへおし觸れつゝ口さしなむればすこし急みてそのおん言の葉なん命なりける必ず忘れさせ給はでとほそ目に見おこせたるまみのううたさ實によろづ忘れはてゝほれぐしうもなりやしなまし

いたうさだすぎてふつゝかにこえふとりたるが似げなういろめかしければ今源内侍となん人はよぶめるをそこにおくれてかみさへにそぎなが

ら猶ふりがたうなまめくなるべしおもふ心ありてにやあるらんゆきの夜さむにことづけてねざけとかにくき名をよびつゝうづみ火のもとにへいじとうでゝひとり飲むさかなは何にかあるらんおほきみきませ婿にせんともいはまほしげなる夜のさまなめりあまえたるこゑしてあこやあこやとよぶはこのほどひとぞうの内より養ひとれるうぐひすのかひごの中の郭公蜂の子などのたぐひなるべしあといらへて出まうでくるは髪はまだあげまきにていときびわながらにいたう

そびやぎてまみのかをりらうたうなよびかにい
 とかうざくになる人さまのをみなにて見まほしき
 おもやうしてさすがにこぼしきやうだいなんし
 たる見るにまづ為ましくてあこやこよひはず
 る寒うて身もうすぐかるゝを如何にきすくなれ
 ばとてひたやごもりにやはこのかはらけそこに
 ほしてへいじとりてひとつ給へとなかばのみさ
 して近うおくをつゝましけれど聞えいなみ難く
 て言けるゝまにゝうちかしこまりをり為みか
 たまけつゝ見てこの子はやなぞかううひゝし

きいまのわらはべはよるづにさくじりをよづけ
 てもあるをいとうもれいたしやめおやには心お
 かぬなんよきいざゝとてなほしひそすにほと
 ほともてわづらふなるべし若きものゝいたく為
 ひしれたるはまたなう見ぐるしけれどまみのあ
 たりすこしあかみてにほひやかになうちみだれた
 るなんさるかたにをかしくもえんにも見えてけ
 こならぬこそをのこはよけれいたうなすまはれ
 そやよしさばれこの寒さをなどいみじうひたゝ
 けてみづからは心をやるなるべしいたうそぼる

るもよづかぬこゝちにはなまはしたなくわづら
 はしくてやうく〜にすべり出ぬればおうなもふ
 しどに入るなるべしげしありてまたあこやあ
 こやとあわたゞしういふにおどろきさめたれば
 いたくうめくこゑすなりうしろめたくてねおび
 れさせ給へるにかとさしのぞきたれば火もきえ
 て物のおやめもなき中にむぐめく〜ひきいる
 ばかりの聲して物のけにとりこめられたるにや
 あるらん身もあつかはしく腹なんいたきあらは
 らはらとぞいふいでや急ひぞし給へるにこそは

何がしのくすしがりせうそししておんゆやま
 らんおんあしまるるべうもやなどよるづにまめ
 だちいへばいなこのはらむすこしおしてといき
 もたゆげにいふさぐりよりてこのあたりにもや
 さふらんとおせばいなはるかにしものかたむと
 いふさはこのあたりにもやさふらふいな猶はる
 かにしものかたむさはこのあたりにもやいなか
 たはやいはけなうぞあるやさばかりそこつかに
 おひのびてみておほどきたるもほどこぞあんな
 れさらばまうとがはだへもてこのつめたきをぬ

くめでたべさゝの葉のさやぐ霜夜だにあるもの
 をこのおほ雪にと手をとらへてひきいたりゆ
 りなうむくつけくて思はずなるこゝちはすれ
 ども得すまひもはてぬをやらをかきいだきてむ
 かもゝのあはひより手さゝいれつゝまさぐりて
 かうものゝしうなんあるものををのこはませ
 ても心ふかうてよづかぬ顔にももてなすかな
 づらいづらさればこそこよなうたけくけしきは
 みにけれ何かはうひくしうとおのれがはだに
 おしふれてとかうするほどにいかなるにかとむ

ねつぶれておそろしうつゝましければわなゝく
 わなゝくもあやしうさすがなるこゝちはすべし
 戀しらぬ人は心もなかるべしとは五條の三位入
 道もよめりけん實に物のあはれしらぬきはの山
 賤の垣ほの内もしほやく海士の宮屋にしも岩木
 ならねばおのがしゝのすきぐしきはあるなる
 べしあしはら田のいなつきがにもよめを得ずと
 てやかひなげにさゝげてはまたおろすなめりか
 どたのくろも白たてゝみしねつくちみなのうた
 ふを聞けば

我せなをほむるならぬどまみ細くはなさへた
かくさくらいろして

うたさへいたうひなびたれど心なんあはれなり
けるあさはなだに紅梅の折えだそめつけたるき
ぬのさるぐしきをばぎながにつぼむりてしら
ぬふの手のごひもてかしらにまとひたればいと
どしろからぬおもやうのさすがにわらゝかにあ
いぎやうづきてさるかたにけしうは有らねばあ
ふにしかふとかいのちかけたるすきものどと
こそあめれきぬかるげにもたげつゝまた

咲く苑のゑじまのをながいとならばたぎてよ
せましわがねやぬちに

となん聲いと長ううたふかなたのあぜづたひに
刈りあげたる稻ことひうしにおほせていたくつ
なひきつゝこれも

かはびらこあきつきりぐすあしびきの山べ
になくはさくすぶのすぶもしまつむしうまお
ひあはれ

と聲しぼりあげてうたひつゝ来るをのこありな
でしこの若葉の色したるあつこえたるたへのき

ぬのたもとせばげなるをきてうなじに柿色の手
 拭をなんかけたる見かはしてかたみにうち急み
 たるまみのやうだいたゞにしもあらぬあはひぢ
 るべしかどのはしらに牛つなぎおきてあぐらに
 尻もたげたれば女も近うよりてなん憩ひがてら
 かたる昨日岩田の田にかきたればこのてる
 日にもえかむらで色しこそくろめあやめの郡の
 大領どの、愛娘にさへ思はれてをちこちにつま
 ざるせなれば見すてられんがねたさうれたさ
 と男の膝によりそひつゝいへばせかいなで、す

がなき事をし聞くものかぢたれかさる事まうよ
 こしゝとなりのおとよめもやまうよこしつらん
 を耳になかけそねやいとろがおもはしゝ田もる
 ごと我をしもころばるれとだましあへればよる
 べとこそたのめよきをりなるをいざせゝと手
 を取りてみているをすこしすまひて人もこそ來
 れひるははづかしと袖もおほふ口さしなめて
 へつひの中よりはひ出る猫のなれてねうゝと
 なきよるを見てこのけものだに催しがほなるを
 いざせゝとあじろべうぶにはたかくれてかよ

りあへるなるべし見給ふな見てはいなさればぞ
 ひるはとわびーがるをそらおぼめきしてふたの
 かいやり女のあしを肩にかけておのが膝に尻も
 たげておよびもてまさぐりなどいみじう心をや
 るなるべし女もやうくけあがりてとうくと
 いふを猶しげしためらひてつとさしいれたるま
 ことにねにもなきぬべしうつし心もなうむつれ
 あひてはてはまたきさの牙の替を買ひておくり
 ぬべくや契るらんかー

男はぬりごめの戸口にはたかくれをり女はかい

やられたる衾にそひふしてわれかのけしきして
 よとぞなく枕のあたりらうがはしう紙のおし
 まろかれたるなどうちちりぼひたり火あかうか
 かげたてるは男のまゝ母なるべし何にかうけ
 ざげざと見あらはしけんとなれも思ひぬべきこ
 となめるをうちけぎやきてたけき事してけりと
 おもふらん顔もちしてかなたこなたしげしにら
 まへつゝほゝのあたりふくらかにしてさうじあ
 らましうひきたてゝ入りぬあるじをあわつけく
 めりさましてこなたの二人ももりきくかにわざ

といとはしたなうづしやかなるこゑしておき給
 ひねおき給ひね事こそあれあやしうこほくと
 物の音なんしたるを例の目ざとにふと聞きつけ
 てぬりごめの戸をねずみのきしめくにもこそと
 うしろめたうてしそくさして見にいたればあ
 はれ思はずなるだいにこそ出まうで來にければ
 したものゝいぬきがふしどに太郎がよばひてな
 んねたりけるいたくおびえて女はばうぞくにの
 みとかやあやしきむしの尻さし出てかくれたら
 んやうにむぐろはけちゑんにて顔をのみおほひ

せり男はきぬもかいやりたるまゝしたひもな
 がう尻よりひきてぬりごめの戸にはひかくれた
 るうしろてまでなごりなう見てなん侍るやこの
 ほどもまうさぬ事かけ太郎がなか〜におほぞ
 うなるよりはそは〜しうつれな〜つくりてし
 のびに見やるながし目のなまけやけさ女はさす
 がにこゝろざしを見せて朝夕のだいのあはせも
 のまでことびとのよりは心を用ゐて多くさへも
 るやうだいなんたゞならずあやしくと覺えしか
 ばいぬきはとう〜はなちやり給ひねよからぬ

こともこそ出まうでくれとをりに觸れては聞え
 しかども心ためくおはしてとわれがしこに舌と
 くいひつづくるをこなたには男もやをらはひも
 どりて耳かたぶけてきく女はきえかへりわびし
 くてあはれと思ひかはしそめし我心さへつらう
 はしたなう如何におもなくてと人に見られんこ
 とをおもへばあけはてぬまにきえも失せなばや
 とうちなげかるゝをなとかさしもと思ひのどめ
 がほに男はさすがにくしいたからでよろづにい
 ひなぐさめつゝ猶こりずまによりふして何くれ

とそぼるゝをあいなうかいひそめあへりあるド
 はよの中のとあるをしかゝるをも廣う見しれる
 心にはいでやさうでもとにがみおもへどかうま
 のあたりさだくゝといたはりどころもなうなり
 はてゝはもてけたんやうもなければとかう思ひ
 わづらふなるべしそはのどめがたきしたかたな
 めるをようぞはしたなめ給へるやもとより若き
 どちのあひだなうあざえたる過なめればこれに
 物ごりしてきようなりてんとまだいひもをへぬ
 をつまはじきをて太郎はまだをよづけぬよじ

ほうなるほんせうよとおやがひもなうたゆめら
 れ給へりしよりかゝる物のまぎれも出まうでこ
 しを猶おぼししうできのどくとのたまはするな
 んかたはらいたきや何かはひきはなつともよう
 せずばはなれどをいつしかとつはりなどせば如
 何はせんたぶすむやけくあすはつとめていぬき
 をさとへ放ちやり給へおのが聞ゆる事かならず
 ひがことならじをためたひてまたなくい給うそ
 といとはしたなういひくたしざめがるをきけば
 さてはこよひなんなごりなめるともねはしりて

かゝやかしきにかなしきをとりあつめもの心ほ
 そうおもひくしてひたひがみの泪にまろかるゝ
 をかきあげつゝ男はなかくにおだひくしう
 何かはあかぬ中をば神だにも避けずとこそきけ
 なみだ川までとよみおきてたえいりけんむかし
 人とはなほいとあさかりけりさのふなばしと
 こそ思ひわたれ玉しける宿も何せんにいづこの
 うらにもはひかくれてよるひるかゝてのみあり
 へんはとてまたひたといだきしめて如何にたの
 しうはおぼひたらドやと顔さしのぞけばすこし

ほゝ急みてうなづくもらうたーさらば心ごはく
 れもてないそやさむかりしなごりに夜ふかゝら
 ーをとてむごにたはぶれてあるあひだにさこそ
 いへど女もともに我を忘れてまたやきかれんと
 はおもふくかいしづめてもえあらぬなるべし
 さすがのあわつけ入もこたびはまことのねずみ
 なめりとや

翰墨

録

滄江生雲堂製

天
人

天
人

天
人

